

「児童の世紀」を振り返る

その四

本田 和子



パラドックスとしての「童心主義」

——遅れてきた湖畔詩人たち（つづき）——

わが国の子どもを巡る今世紀は、わが国流の科学的児童研究の幕開けの時でもありつつも、同時に、前稿引用の石川啄木に代表されるわが国流のロマン派詩人あるいは、湖畔詩人たちがひたすらに童心に憧憬し童

心賛歌を謳い上げること幕が開かれている。ワーズワースやブレイクら本家イギリスの詩人たちの歌声が、あたかも一世紀遅れでわが国に届いたとでも言うかのように……。このことをめぐる前回の補いとして、先ず、これらの海の彼方の先達たちの童心賛歌を振り返ることから、本稿を始めることとしよう。

「小児は成人の父なりとは湖畔の詩人が歌へるところ

となりき」と、啄木の一文に登場した湖畔詩人が、ワーズワースを指すものであることは言を待たない。ワーズワースが、『抒情歌謡集』から『序曲』に至る多くの作品において、繰り返し「子ども」を、より正確には「子ども時代、しかも自身の幼年時代」を主題化し、その喪失に思いを潜めたことはよく知られている。

子ども時代の「主客未分の合一」こそを人間の「英知」と見なす子供観・人間観は、彼個人の幼児体験に帰されるにまして、一八世紀末の多感な若者の成長を代表するものと見なすべきだとは、ピーター・カヴニーの優れて的確な指摘であった。たとえば、ニュートン力学とロックの「人間悟性論」に決定付けられた一八世紀的合理主義と唯物論的決定論は、若きワーズワースを先ず魅了したが、やがて大きな失望に陥らせていく。また、当時の若者の人道的政治心情によって激しく共感され、それでいて、続く恐怖政治のゆえに

政治への幻滅の源泉となったのが、フランス革命であったことはよく知られている。彼の場合も例外ではなく、ワーズワースの精神と心情の軌跡は、一八世紀生まれの生真面目な若者たちが、知的成長の過程で味わったであろう共通の経験以上でも以下でもない。続く失意の時代を経て、その後を訪れたのが「自然」と「子ども時代」への収斂であったとは、「理性」を追い求め過ぎた帰結としての、「本能」と「感性」への回帰と捕らえることが可能だろう。

彼の迎ったこの軌跡を、時代的心性の動向と見るなら、それは、人間工学的「観念連合理論」とその所産たる「決定論」から人間を解放し、生きる自由を回復すべく志向されたものとも言い得る。すなわち、連合的操作の外にある「自然」と、連合以前の本能を生きて「子ども」へと、思いを潜めることが新しい希望として迫り出してきたのである。

さて、視線をもとに戻して、わが国の遅れて来た湖

群詩人たちに注目しよう。先に引いたように、石川啄木が前例として掲げたのが、一九世紀詩人たちの「子ども礼讃」の言辭だったのだが、それらが、彼の魂を激しく揺さぶり、当時の科学的児童研究やそれらを踏まえた児童教育にあえて反発して、熱烈にして過激な「子ども賛歌」を謳い上げさせたのであろうと推測することは容易である。先の文中には、「知識は過重されたること既に久焉（ひさし）」、「知る知らざるに閑せず、自ら為すある人は乃ち生甲斐ある人なり」とばかり、「真と美と生命」を忘れた知識偏重の啓蒙主義に対する苛立ちが示されている。また、林中の猿との問答の形で、「汝等が称して文明の機械というもの、何れか汝等が怠慢を助長する悪魔の手たらざる」、あるいは、「汝等は随所に憎むべき叛逆を企てて自然を殺さんとす。自然に叛逆するは取りも直さず之れ真と美とに対して奸悪なる殺戮をなすなり」など、激越な言辭で文明批判が述べられていた。

「子ども賛歌」と「自然回帰」という砦に勝利の旗を翻すべく、「通俗的啓蒙主義」と「文明開化思想」に敢然と宣戦布告がつきつけられる。啄木らの言説をこう解すると



き、それは、まさしく、一世紀前のワーズワースらが描いて見せた精神の軌跡と重なり合う。彼らは、滔々と世を席卷する近代合理主義に対して、警鐘を打ち鳴らす立場を共有したのではないか。とすれば、一八世紀末イギリスの若者たちと同じ土壌の上に、わが国今世紀の多感な若者たちも置かれて、失意や憤りに苛まれていたのではなかったらうか。

啄木らの「子ども賛歌」、あるいは、小川未明らの「童心憧憬」も含めて、それらはいずれも、明治新体制への失望から生じたと言われている。確かに、啄木が幸徳秋水の大逆事件に強いシンパシーを抱き、未明

がアナキストを標榜した一時期があったように、彼らの「子ども回帰」が、体制への失望や憤りと無縁であったとは言いがたい。しかし、彼らの体制批判を政治体制へのそれとしてのみ把握することは、即断の誇りを免れ得ないのではないか。それは、明治維新以降、ひたすらに啓蒙の繰り返された西欧型合理主義への疑念、その知的土壌を疑うこともなく展開される学校教育への抵抗、そして、さらに、楽天的・向目的に前進を開始した児童研究指導者たちへの苛立ちも含めて、広い意味での知的・文化的体制への異議申し立てと解すべきであろう。

ところで、湖畔詩人たちが「子ども」に見いだした価値は、決定論に異議申し立てし、人間を静的な連合の呪縛から解き放つために機能させられている。それに比して、啄木の時代に、世界は進化論によって動的なものへと転換していたし、「子ども」には、既に重要な価値が付与されていた。したがって、彼らのなし

たことは、近代主義が奏でた「体制的子ども賛歌」に對しての異議申し立てということになる。仮に、この「反体制的子ども賛歌者」を「童心主義者」と呼ぶとして、彼らは、「子ども」は進化によって価値あるものへと成長するにまして、「童心の所有者」という存在そのもののゆえに価値があり、「童心」は既にして完成体であるとその無謬ぶりを讃えたのであった。

彼らの提唱した「子ども賛歌」や「童心主義」は、しばしば、次のように批判されている。すなわち、主観的心情に流れて科学性を欠き、客観的对象としての「子ども」への目配りがなく、と……。しかし、このことは彼らの主張の特色、すなわち、依って立つ基盤そのものであって、この特色抜きには存在意義そのものが薄弱となる。なぜなら、これらの「子ども賛歌」は、進化論的科学主義に支えられて王道を行く「体制的子ども賛歌」に抗し、それらを潔癖に排除した地平に姿を現したものだからである。

市場を行く「童心主義」

——三越の子ども商戦と

「大供会（おんどもかい）の出現——

一九〇九（明治四二）年四月、三越百貨店は、一ヶ月にわたる長期間の「児童博覧会」を開催している。

三越は、当時、欧米流のデパートメント・ストアーを目指して、文化人・知識人らをも巻き込み、意欲的な多角経営を試み始めていた。

この「児童博覧会」には、顧問として巖谷小波が参画して大いにその見識を披露したと言われている。小波は、周知のように、少年小説『こがね丸』の成功以来、文壇の「子ども屋」として、巷間にその名が高かった。そんな彼を招聘し、百貨店の一大イベントの成否を委ねる。この動きの背後から透けて見えてくるのは、当時の社会が、より正確には市場社会かと言うべきかも知れないが、それらが「子ども」と結んだあ

る種の密約に他ならない。三越百貨店が、「博覧会」と

「子ども」という二つの主題を浮上させたとは、山口昌男の興味深い指摘である。言うまでもなく、このことは、わ

が国の今世紀が、都市型消費社会へと転換して行く予告でもあった。

三越百貨店のイベントとして、「児童博覧会」を実施することは、同じく山口の言によれば、子どもの生活文化への関心の高まりに注目した「流行会」メンバーの提案によるとされている。「流行会」とは、三越の創始者日比翁助の肝入りで集められた学者・文化人の集いであった。日比翁助の抱負は、百貨店に、単なる商いのための大型店舗であることを越えて、カルチュアセンターの機能を担わせることにあったと言われるが、確かに、「流行会」に参集したのは、人類学



の坪井正五郎、民俗学の柳田国男、歌人の吉井勇、佐々木信綱、あるいは画家の黒田清輝、浜田青陵、杉浦非水など、世に知られた錚々たるメンバーであった。そして、メンバーの一人巖谷小波に、大任が委ねられて、先の「児童博覧会」の実現となり、大好評裏に終わったこの催しは、以後、毎年開催されて三越の名物イベントとなった。

「大供会（おゝどもかい＝子どものような大人の集まり）」の発足は、「子ども」の浮上を象徴する出来事である。従来の店舗とは異なる欧米型の百貨店の登場によって、都市住民の間には新しく「趣味」という概念が発生した。先の「流行会」のメンバーもこれら趣味人の代表とも言い得るのだが、彼らは宣伝用情報誌『時好』の編集に参画しつつ、おりに触れて、展覧会や講演会を催して趣味の普及に努めるのだが、そのなかに、「子ども」というテーマも位置付けられ、「玩具」や「児童用品」への趣向が形を現し始めてくる。

関心のあるメンバーによって、「児童用品研究会」なるものが結成され、しばしば、「子ども」をテーマとした会合なども催されるようになる。

言うまでもなく、新興百貨店のバックアップする研究会であってみれば、当然、それは、営利事業と結び付いていたのであり、その背後には、パリのオ・プラントタンやビュエット・ショーモン等の百貨店が、人形や玩具等の子ども向け商品に力を入れているという事情も存在していた。時代を見るに敏な日比翁助が、商行為の前面に「子ども」を出して見ようと思いついたのは、こうした世界的市場動向との連動であろう。

ただし、多くの文化人・趣味人たちが、こうした商業主義的な動きに唯々として、というよりむしろ欣然と、協賛の意を表明して参画し、子ども関連のことに、時間に時間と労力を惜しまなかったところに、「児童の世紀」の真骨頂がある。仮にその意図が新市場の開拓であったとしても、選ばれたテーマが時宜を得ていた

ことは確かだし、また、人々が、自分の「童心」を顕示したがるような心性が醸成されていたことは事実だろう。彼らは、自分がいかに子どもっぽいか、そして、どこまで子どもに帰れるか誇示し合って、それを楽しんだのであった。

この間の事情に関しては、私どもに親しい倉橋惣三も、当時を回想して次のような一文を残している。すなわち、時代の空気のなかに、「子ども性」を楽しむ心性が漂っていた、と……。

当時（明治の末）の東京には、子供向きの娯楽の機会がいろいろあった。というよりも、おとなの娯楽が子供にも適していたといつていいかも知れない。おとなと子供の共通の娯楽ということでは、現代のリクリエーション論として一つの問題になるが、特におとなだけの慰安は別として、社会的にそれが共通でもあんまり差支えない程度

に、おとなの娯楽に稚氣が多かったのである。あるいは、当時の社会的な娯楽の客寄せの主な対象は子供で、おとなは子供のつきそい、同伴者、さ



らに往々、子供をだしに使用して楽しむ子供のような大供であったと見れば、むずかしい問題もあるまい、そのつきそいでも同伴者でもない、また、必ずしも、子供をだしに使用してぶらつく与太郎でもないが、そうした機会を拾っては、街の子供と楽しみを共にしに出かける彼であった。（『子供讃歌』より）

こうした「子供のような大供」の集うたのが、「大供会」という趣味と遊びの会である。三越の資本という十分な背景を持って、坪井正五郎のように新案玩具

の考案に手を染めるものもあり、また、講演や玩具収集、あるいは懸賞玩具の審査など、各地を旅して行く先々で「子どもぶり」を發揮した。メンバーの一人の松居松葉は、旅の模様を左記の一文で面白おかしく、次のように伝えている。

いずれも児童用品研究員でいずれも児童狂というよりは、自分自身が児童（こども）らしい連中、旅行の目的に至っては更に児童らしい、大阪府で開かれた児童博覧会見物のためであるのだ。

（『三越』第一巻第二号より）

試みの一環として、一九二一（明治四四）年、大阪三越で開催された講演会では、巖谷小波が『児童本位』という演題で、また、坪井正五郎は『諸人種の子供』と題された講演で、それぞれ、満場の拍手を受けたという。小波はこの講演旅行について次のような短

文を発表していた。

さて、こう見來つた処は、いずれ劣らぬ大坊ちゃん、これが京、大阪まで乗り出して、仲よく遊んで歸つた処は、正に我が児童用品研究会の、万歳と連唱するに足ると無上に子供がる拙者の如きは、食過ぎもせず、寝冷えもせず、迷子にも成らず、ダムもこねず、ほんとにおとなしかったぜと、自分のことは棚に上げて記す（『三越』第一巻第二号より）

私どもは、しばしば、倉橋の子ども観や、幼児教育における児童中心主義を、無類の「子ども好き」という彼の個人的特性と、海外に興隆した新教育思想との関連で説明しようとしてきた。確かに、自らの歩んだ道を、「子ども道楽」の遍歴と位置付ける彼自身の言からみても、また、当時、アメリカ合衆国などに勃興

した進歩主義的な教育運動の影響という点からも、そうした把握が妥当性を持つことは否むべきもない。ただ、言うまでもない事ながら、それは、時代の空気でもあった。何しろ、「かくあるべし」と言う儒教的モラルや、「追いつくべし」と目標化された欧米型行動規範から逃れ、「子ども好き」や「稚氣」をのびやかに解放しつつ天下の王道を歩くことが可能となったのだから。

「童心主義」の二つの相

ところで、私どもは、次のようなことに気付かされる。先に引いた石川啄木や小川未明によって発見された「童心」が、時の流れに抗して異議申し立てする心性の表現であったのに比して、「大供会」の人々の取り出した「童心」は、何と大らかに陽光の当たる場所におかれていることか。しかも、「童心」が「回帰すべき故郷」と位置付けられているところは同じなが

ら、前者は、そこに「人間の理想」と「失われつつある価値」を見てそれに渴仰し、さながら伝道者の熱意でその喧伝に努める。他方、後者は、

玩具を集めたり改良したり、

あるいは、博覧会や展示会などイベントを開催するなどの仕方、自他に共有される「子どもらしさ」を楽しませるための「現実的営為」に意を注いだ。

ここに、私どもが見るのは、今世紀前半におけるわが国の子ども関連事象に付された特有の徴である。よりはつきりと、子どもに注がれるまなざしとその表現としての子どもを巡る動きとの、両者に付されたアンビバレントな二つの徴と言うことも可能だろうか。

すなわち、反体制教育・反功利主義・反合理主義などと、とりあえずは子どもにかかわる新動向に「ノン」の意志を突き付け、その表現として標榜される



「童心主義」と、市場社会の完成や学校教育制度の充実という体制的動きに抵抗のエネルギーを割かず、時にその流れに乗り、時に自身の趣味に偏して距離を置きつつ、子どもとの共存を楽しむ「童心主義」の二つ……。後者は、先にのべたように、商業主義と結び付いて市場社会の進展に手を貸し、あるいは、学校教育のなかに場所を求めて制度的結実を志向した。前者は、後のプロレタリア運動への道を用意し、後者は、モダニズム運動や大正自由教育運動と連携したと言うことも可能かも知れない。

ところで、先に触れた山口昌男は、児童博覧会や「大供会」などの一連の動きを、他の多くの民間学者たちのネットワークや、彼らが演じて見せた興味深い諸運動と並べて、『敗者の精神史』という論稿のなかに位置させている。敗者、すなわち、明治藩閥政府の階層秩序の外に出た人々の、活躍の一つと捕らえられているのである。とすれば、「子ども」関連事象に熱

中した人々は、いずれも、特に反体制を言挙げしようとして、あるいは商業資本や体制教育と手を結んで流れを泳ぎ抜いたかに見えたとしても、所詮は、公的ヒエラルヒーから外れて、権威や権力とは無縁の周边的位置に佇んでいたということになる。

しかし、私どもは、このことで失望し、その位置付けを自嘲的に捕らえてはなるまい。私どもは、子ども関連の専門家として、「子ども」を中心化することに慣れ過ぎていた。したがって、「児童の世紀」の光芒も、結局は局部を照らすささやかな灯火に過ぎないと告げられるとき、いささかの挫折感に襲われもするが、周辺あるいは敗者の視点抜きには、真の文化形成など、到底、覚束無いという事実を思いを至すべきであらう。

(聖学院大学)